

5年10分

No.

人生の大きな峠を、また一つ自分ほうしろ
 にした。
 十年一昔だといふ。すると自分の生れた
 とほむろあかしの、あかしの、そ
 のまに昔の事である。まだ、すでにが昨日
 日のようにばかりおもはれてゐるのに、いつ
 のまにそんなふにすぎさつてしまつたのか。一

No.

年とは、ふんな短いのだらうか。ふれでよ
 いのか。だが、それだからいのちほ貴いので
 ありう。
 さらば永遠を思慕するものの寂しがある。
 振りかへつてみると、自分もたくさん詩
 をかいてきた。よくかゝうして書きつづけてき
 たものだ。
 その詩が、よし、どんなものであらうと、
 ぶの一すぢにうぶがる境涯をおもへば、まふ

十ノ廿 松屋製

(SM) (1)

ふんといふ童心めいた慾張りの、たがまた
 くれほど深い實在自然の聲があらうか。
 自分に此の頃にあつて、ようやく、そ
 したふとが泌々と思ひあはさるるよ
 うにふつた。齡の効かもしれふい。
 藝術のふい生活はたえられふい。生活のふ
 い藝術もたえられない。藝術が生活か。徹底
 は、そのどつちかを撰ばせうにはあかない。
 而も自分にとつては二つふがら、どちらも棄

十ノ廿 松屋製

(SM)

(C-1)

い。とに、まふとに、それはいたづらぶとてはな
 いかしより、ふでをたてあそぶ人多くは、
 花に耽りて實をそふふひ、實をふのみて風流
 をあふる。
 くれは芭蕉が感想の一つであるが、ほんと
 うにそのとほりた。
 また言ふ、花を愛すべし。實は喰ひつ
 べし。

3

✓

言である。
詩をつくるより田を作れ、といふ。よい箴
けれど、それだけのふとである。

十ノ廿 松屋製

(SM) C 1)

✓

れしくてたまらふい。
だんだんと詩が下手になるので、自分ほう

✓

No.

詩が書けなくなればなるほど、いよいよ、
詩人は詩人にふる。

✓

No.

だけの自分である。
中からふろげで馬鈴薯をた合掌禮拜する
かうしてそれを喰べるにあらつて、大地の

幽遠である。

うしよろ、かの道元の谿聲山色はあまりにも
それならなんぢのいまはと問はれたら、ど

あつた。
ふれまでの自分には、そふに大きな悩みが
こるふとがでない。

